

## 看護基礎教育における臨床実習（各論）展開に関する一考察 その2 — プロフィール分析からみた教育効果の年度別比較 —

小玉美智子・若林敏子

### I はじめに

看護の基礎教育において臨床実習は必要不可欠な学習方法であること、また、その臨床実習をいかに展開し学習効果を上げるかについてはすでに多くの報告がなされている。筆者らも第一報において臨床実習を効果的に、かつ教育的にと考え各病棟実習の前後に学内実習を計画し、導入・まとめを実施し、その有用性について報告した。今回は、その有用性について3年間をプロフィール分析により比較検討をした、その結果僅かではあるが全体的に学内実習の効果が年々肯定度が高くなっていく傾向がみられたので報告する。

### II 研究方法

#### 1. 調査方法

質問紙法で自記入による。設問は一報と同様、①病棟実習開始前の学内オリエンテーション（以下学内オリという）における学習内容②学内オリの効果（病棟実習に役立ったか）③病棟での学習内容④患者との人間関係⑤看護過程の展開について質問紙を設けた。尚、各質問に対しA強肯定、B弱肯定、C

弱否定、D強否定の4者択一で解答させた。また、学内実習において強化してほしい学習内容、病棟実習終了後のまとめでの効果が大きかったと思われる学習内容等については自由記載とした。

#### 2. 調査対象

平成元年度卒業生 42名、平成2年度卒業生 42名、平成3年度卒業生 38名

#### 3. 調査時期

第一報の調査時期と同様、臨床実習をすべて終了した2月上旬に実施

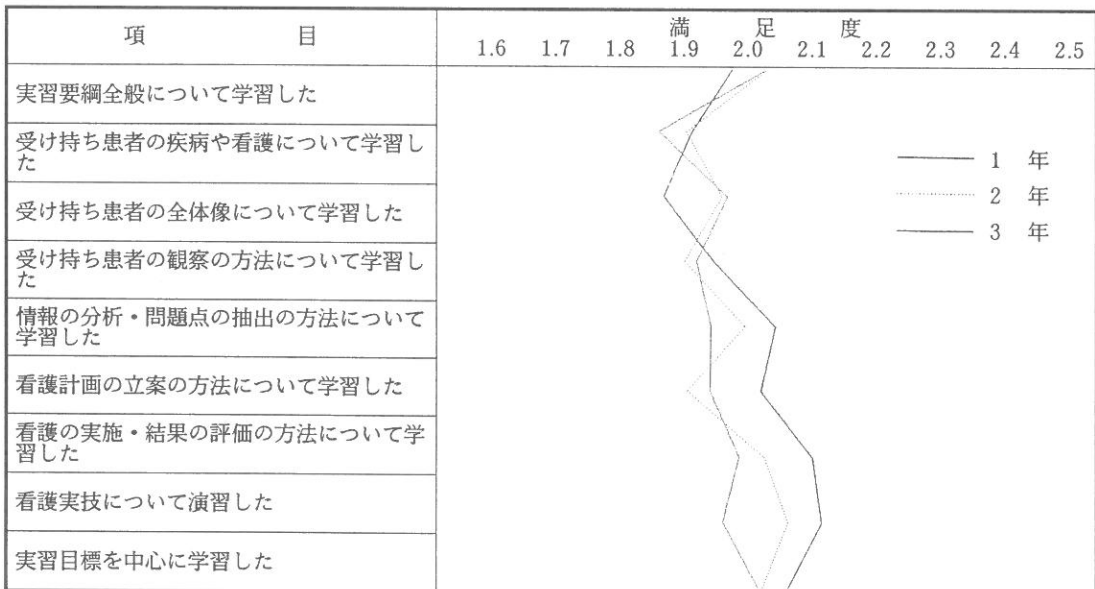
### III 調査結果及び考察

今回のプロフィール分析の尺度は、学習内容の学習効果における満足度が、強肯定1点、弱肯定2点、弱否定3点、強否定4点として計算し算出たものである。

#### 1. 実習開始前オリエンテーションについて

各教科ごとに教科の特殊性・病棟の実情を踏まえて実習展開に必要な学習項目を担当教員が精選し学生が病棟にスムーズに導入でき実習効果を上げようと努力していることは前回述べたところである。今回3年間

図1 実習開始前オリエンテーションでの学習内容



を比較してみると(図1参照)全体的に僅かではあるが肯定度が年々高くなる傾向が見られた。特に「看護実技」について年々高くなる傾向が一番強く、「看護の実施・結果の評価の方法」「情報の分析・問題点の抽出の方法」がそれに続いている。「看護計画の立案の方法」については、元年度は肯定度が低かった、しかし、2年度においてかなり高くなっている。全般的に看護過程に教員は力を入れて指導に当たっていることが伺える。また「受け持ち患者の疾患や看護」については3年間を通して肯定度が高く、かなりウエイトを置いて学習に取り組んだと思われる。しかし、学内

実習は、あくまで紙上事例での学習であるため限界があることも事実である。

## 2. オリエンテーションの効果について

この内容について平成元年度は質問していないため2年度と3年度を比較した。(図2参照)「受け持ち患者の疾病や看護」については学習も十分にしており、その効果も最も高い、この項目については第一報でも同様の結果を得ており学内実習での学習効果を学生は認めている。「受け持ち患者の観察方法」「看護技術」については2年度に比べ3年度において効果が高くなっている、看護技術については、学習も高くなっており

図2 実習開始前オリエンテーションでの効果有用性

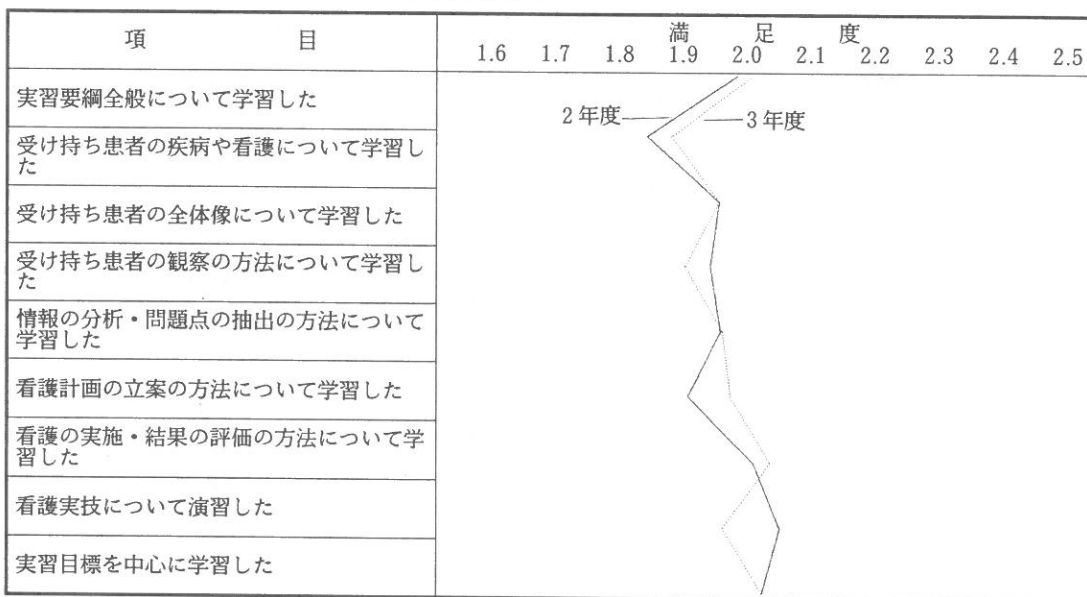
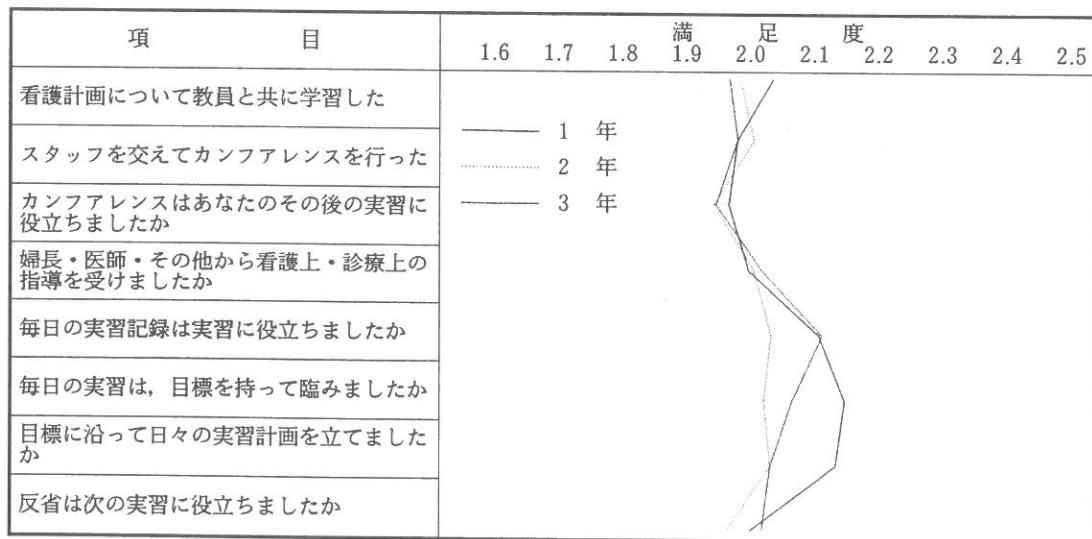


図3 臨床実習での学習内容



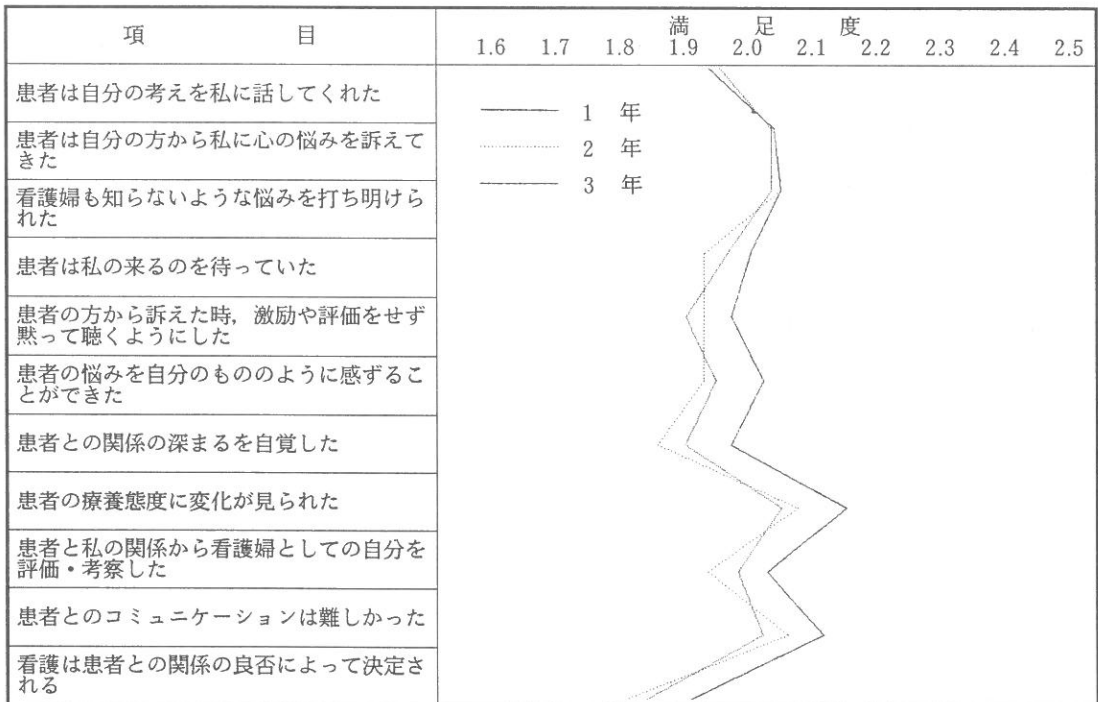
うなずけるところであるが、受け持ち患者の観察方法については、第一報でも述べたように現場で直接患者に接しての観察と紙上事例とではかなりのギャップがあり学習効果と結びつかなかったものと思う。一方、「看護計画の立案方法」については、病棟実習における効果が下がっており紙上事例の選択をする際、考慮する必要があるのではないかと考える。

3. 病棟での学習内容について

病棟実習において3年間を通して肯定度（満足度）の高い項目は（図3参照）「カンファレンスはその後の実習に役立った」ことを挙げており、カンファレンスは現場の指導者・教員・グループメンバーを含めて討議することにより、受け持ち患者の看護の方向性を確認することができると共に個人では気づかない多くの具体的な助言を受けることができ学生個々は大きく成長する。また看護の充実感を得ることができるし、現場の指導者との人間関係もでき、カンファレンス後の看護が円滑に展開できるようである。小池は「カンファレンスは受け持ち患者の看護過程上の身近な問題を、異質な経験や能力を持つグループメンバーと討議し………少人数の学生が教師の指導のもとに、共通のテーマについて討議する集団思考のための教育の場として重要である」と述べているが、筆者らも同様

に考える。今後さらにカンファレンスには現場の指導者の多くの参加を得て内容の充実・強化を図り学生が充実した実習ができるよう支援することが必要であろう。このことは「スタッフを交えてカンファレンスを行った」「婦長・医師・その他から看護上・診療上の指導を受けた」の項目において肯定度が高いことから言えるところである。一方、「毎日の実習記録は実習に役立った」は、肯定度がかなり低く年々高くなっている他の項目と異なった結果となった。このことについては第一報でも述べている様に実習内容を記録することで自分の看護を振り返り評価し向上する点から考えると学習効果は大であると思う、しかし、記録について吉武は記録を書く時間が段々増大し、相対的に本来の意味での実習の時間が削減されている、また、病棟の中で看護記録でなくてワークシートを書き、そのワークシートを書くネタを捜しに患者さんのところに一寸行って後はせせせと書く風潮があるという内容を述べている。また、中には、夜遅くまでその日の実習報告・翌日の行動計画を書いて朝寝不足の顔をして実習に臨み、患者の顔を見ないでカルテを見て一日の行動計画を修正する。その上膨大な行動計画は一日の実習の最後に「この計画は実際にはできませんでした」と報告して一日の実習を終ることがある。臨床実習は、

図4 患者との人間関係について



患者のベッドサイドに行き「よく観察し、患者さんに、今どの様な援助が必要かを判断し行動計画を立て、実践する」ことであると思う。その関わりを通して実習の喜び・楽しみが湧くものだと思う。その実習が記録が重荷になり、実習の楽しさを奪っているとしたら問題があるのではないかと思う。教員はこの現状を十分把握し、記録物の取捨選択が必要であろう。「毎日の実習は、目標を持って臨みましたか」が肯定度が他の項目に比べ低くなっている、臨床実習は学生が主体的に学習する場であることから考えると、学内における授業と同じような心構えで臨むと、ただ時間のみが経過し実習場でしか学ぶことのできない学習内容が何も習得できずに終わるということになりかねない。この点学内オリで各教科の実習の目的・目標を確認し、実習に臨む心構えを自覚し、目的意識をしっかり持って実習に出ることの大切さを学生自身に納得させることが必要であろう。

#### 4. 患者との人間関係について

患者との関係学習については図4の通りである。この患者との人間関係については全般的に肯定度が高くなっている。中でも3年間を通して肯定度の高かった項目は、「看護の良否は患者との関係の良否によって決定される」を挙げており、看護を展開するうえで患者との人間関係の重要性を十分自覚している。次に、「患者は自分の考えを私に話してくれた」「患者との関係の深まりを自覚した」と続いている。臨床実習でなければ学習できないものの一つに人間関係学習があると思う、その関係学習において肯定度が比較的高率であったことは望ましい結果を得たのではないかと考える。一報でも述べたが「患者の療養態度に変化が見られた」は3年間を通じて低い結果となったが、学生の短い実習時間から考えて当然の結果と言えよう。

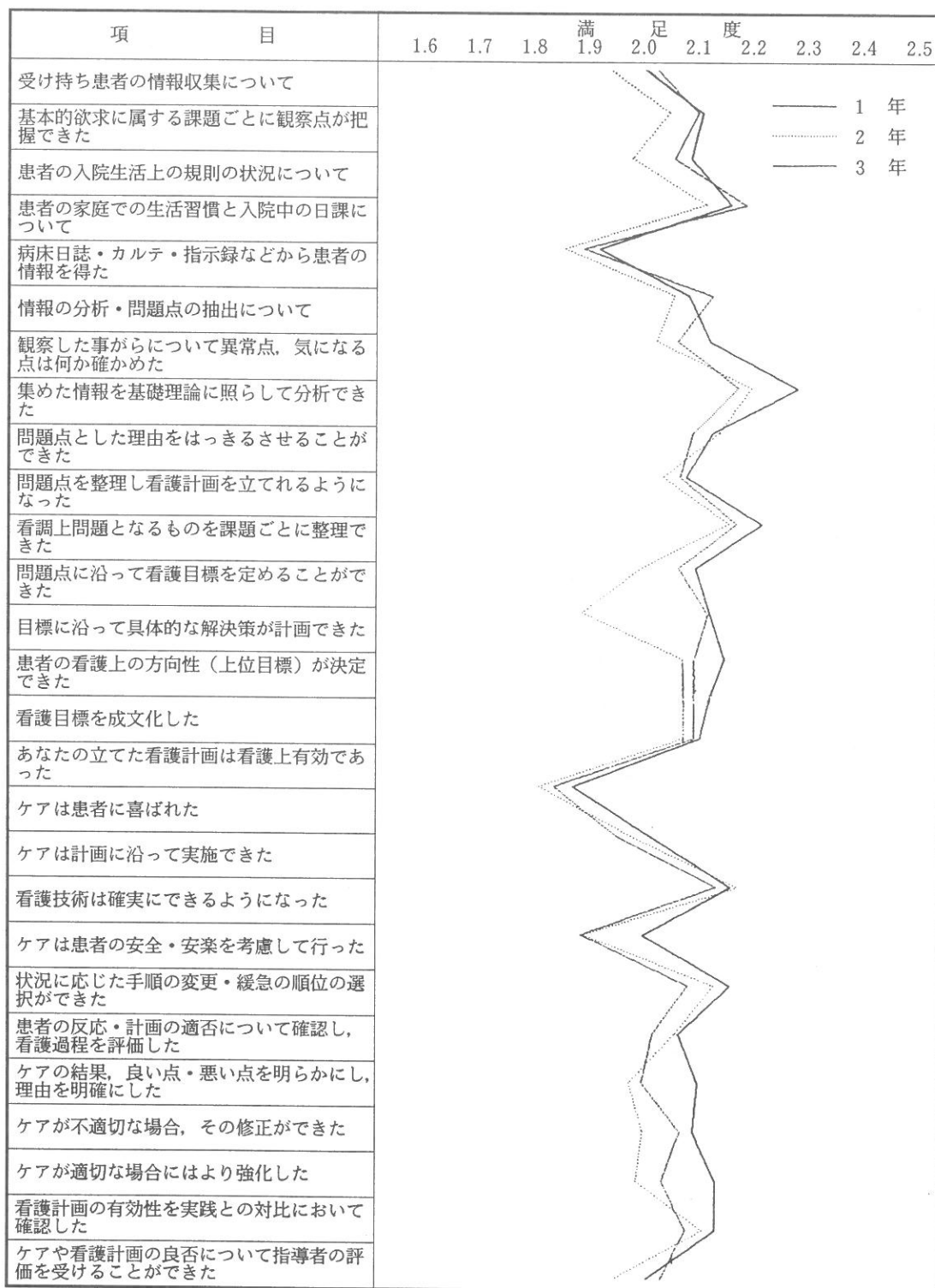
#### 5. 看護過程の展開について

看護過程の実践を通して何を学んできたかを大きくアセスメントの段階(患者の情報を集め、それを分析、考察して健康上の問題の抽出)看護計画立案・看護目標の設定の段階(看護問題毎に看護目標、解決のための具体的看護ケアを計画)実施・評価の段階(計画に基づいて問題解決のための具体的に行動をする、行動の結果から問題解決の程度を吟味し、それに続く看護を検討する)に分けて見ると(図5参照)アセスメントの段階で比較的高い項目は「受け持ち患者の情報収集」で、その情報は病床日誌・カルテ・指示録から収集しているものが3年かを通して圧倒的に高い。次に看護計画の立案・看護目標の設定の段階では、

肯定度の低いものが多く、中でも「集めた情報を基礎理論に照らして分析した」は3年間とも特に低いが年々少しづつではあるが高くなる傾向が見られており、そのところに希望をつなぎたい。次に低い項目として「看護上問題となるものを課題ごとに整理した」が続いており、第一報でも述べたように、アセスメントの過程に比べ集めた情報を基礎理論に照らして分析したり、抽出された問題と問題の関連性を見極め統合することは不得意とするところであろう。しかし、看護過程の展開において避けることのできない重要な部分であり、今後の指導に当たって教員は、本学の学生の不得意とする部分を充分把握した上で適切な指導ができるよう努力していきたい。また、「看護目標を定めることができた」「上位目標を決定することができた」「看護目標を成文化した」の項目において肯定度が低迷気味である。看護上の問題と問題の関連性を見極め分析・統合することが低率を示したことも関連するところであり問題とした根拠が明確になっていないためと考えられる。情報の解釈や、情報間の関係を明確にして、問題の本質を把握する方法としてDr.Hurstが提唱している図式化についての指導を強化することも有効な手段かもしれない。看護計画の実践・評価の部分ではケアは計画に沿って実施でき、実施したケアは患者に喜ばれた。また、実施に当たっては安全・安楽を考慮した等患者との人間関係の項とも関係するところと思うが、本学の学生の特徴とも言える患者を思う気持ちの表出であろう。しかし残念な事に「看護技術は確実にできるようになった」の項目が肯定度が低いことである、このことは学生の謙虚な気持ちか、事実看護技術が未熟であるのか指導に当たる教員が学生と共にベッドサイドに行き、学生の行う看護技術を確認し、その時適切な指導をすると共に、学生自身も技術の向上のために努力することが大切である。実施に伴う評価に関連する項目の肯定度が低い傾向にあり、適切な評価・検証ができていないことが伺えるが、看護過程の展開において、情報収集・情報の分析・計画立案・実施・評価と一連の意図的にしくまれた看護の学習方法であることを考えると、評価は其中でも実施した看護の良否を判断し、次に続く看護へと展開する重要な部分である。この項目については実習開始前オリエンテーションでの学内実習において肯定度が低い項目でもあり今後の指導において情報収集・分析・計画の立案にのみ時間を費やすのではなく、評価・検証の段階にも充分努力を払う必要がある。

#### 6. 強化してほしい学習内容について

図5 看護過程学習について



臨床実習に先立って学内で強化してほしい学習内容は表1のとおりである。一番希望の多かったものは「実習病院での看護処置や看護手順」であり、短い実習期間でより早く現場に適応できることを望んでいる。臨床実習は、学内で習得した知識・技術を統合し応用展開する学習方法であると言われているが、学生にとっては時間的余裕がないのか、即使えるマニュアルに依存する傾向がある。次に看護計画の立案を挙げているが、現在でも多くの時間をかけて学習している項目ではあるが、前述したように、この項目について学内で学習したことが病棟での実習に余り役立っていないことから学習方法を検討する必要があると考える。看護技術については、「看護技術は確実にできるようになった」という項目で、肯定度が低かったこととも関連し、今後学内において、どのような条件設定をして技術訓練を行うかが学習効果を左右する鍵になると思う。また、基礎技術については、理論的根拠に基づいた確実な技術が身につくまで繰り返し訓練することが必要であろう。「4号紙の書き方について」はK病院で実習する学生に課せられた記録の一つで、看護問題毎に期待される結果(短期目標)、その日の具体的な看護活動(行動計画)を書いたもので、その4号紙に

表1 臨床実習に先立って学内で強化してほしい学習内容

- |  |
|--|
| <ol style="list-style-type: none"> <li>1) 各実習病院での看護処置や手順のポイントについて</li> <li>2) 看護計画立案の方法</li> <li>3) 看護技術について</li> <li>4) 看護記録の書き方について</li> <li>5) 4号紙の書き方について</li> </ol> |
|--|

表2 学内実習(まとめ)での学習内容の有用性について

- |   |
|---|
| <ol style="list-style-type: none"> <li>1) 《受け持ち患者の症例報告について》 <ul style="list-style-type: none"> <li>・情報交換により種々の疾患や看護の方法について学んだ</li> <li>・情報の収集や問題点の抽出・分析の仕方について</li> <li>・看護計画の立案の方法について学んだ</li> <li>・自分の看護を振り返る機会となった</li> <li>・自分の看護に生かされる</li> </ul> </li> <li>2) 《実習の反省会について》 <ul style="list-style-type: none"> <li>・反省会の内容が次の実習教科へ生かすことができた</li> <li>・他学生の看護計画や看護に対する考え方を学ぶとともに参考になった</li> <li>・自分では気づかなかった事が意見交換により多くの気づきができた</li> <li>・自分の反省すべき点などを見直すことができた</li> <li>・観察点やコミュニケーションの方法などについての助言により次の実習での心構えができた</li> </ul> </li> <li>3) 《テスト(小テスト・面接テスト)》 <ul style="list-style-type: none"> <li>・自分の知識を再確認できた</li> <li>・自分の理解度が解った</li> <li>・復習ができ勉強する気になる</li> <li>・自分の勉強不足を確認でき学習意欲をもちたてる</li> <li>・自分の症例以外の学習とまとめになる</li> </ul> </li> </ol> |
|---|

基づいてスタッフに一日の行動計画を報告するため、実習開始と共に要求されるため、教員はその記録については説明し実際に指導しているにもかかわらず理解できない面もあり学生にとっては切実な問題となる。学生からの要望も考慮して今後の指導計画を再検討する必要があてであろう。

#### 7. 学内実習(まとめ)での学習内容について

学習内容については表2の通り①受け持ち患者の症例報告、②実習の反省会、③テストが主なものである。症例報告については、他の学生の症例報告や意見交換により種々の疾患や看護の方法を学んだものが最も多く、また、その有用性を認めている。このことについて高橋も最近<sup>3)</sup>は受け持ち患者は1~2名であるため同僚の受け持った患者の状態とか、病気とか、治療とか、それらの看護のポイントなどを発表し合うことによって、直接、その患者を受け持たなくても、間接的に自分の知識や体験を増やすことになり、その結果、批判力・協力・あるいは伝達する能力も養われるという内容を述べている。その他に看護過程の展開に関する内容、自分の看護の振り返り等症例報告をすることの意義の大きさを示唆している。次に反省会については、学内において自分の行った看護を振り返ることができる時間を設けたこと、そして反省会という学習内容を組み入れたことは、臨床でその時その時には気づかなかったことに気づいたり、理論との結びつけができた機会となり、学生自身看護に対する考え方や、人間をトータルに見る能力が養われるのだと思う、その積み上げが学生を大きく成長させることにつながる<sup>3)</sup>と考える。

#### IV 要 約

臨床実習に先駆けて行う学内オリとその効果、病棟における学習内容、患者との人間関係、看護過程の展開等についてその満足度・有効性の面から3年間を比較検討してみたが年次別による大きな特徴を見ることはできなかったが、肯定度が比較的高い項目は3年間とも高く、反対に低いものは3年間とも低いということが判明した。しかし、全体的に多少ではあるが向上している。このことから今後の指導で強化充実させる項目、現状を向上にむけて継続するものが見えてきた。その項目の主なものを挙げると以下の通りである。

- ①看護の実施・評価の方法についての学習は、病棟実習での効果も低く、また、看護過程の展開においても肯定度が低くなっているが、この項目については学内オリのみを強化するというより、実践を通してそのつど指導することが効果を上げる一方法かもしれない。
- ②看護実技についても学内オリでの学習、病棟での効果、看護過程の展開といずれにおいても肯定度が低く、学生は看護実技についての学習の強化を強く希望しており、教員は効果が上がるよう学習内容、学習方法を検討する必要がある。
- ③実習目標を中心に学習できたかという項目については学内オリ、病棟での効果、実習内容と一連して低くなっており、実習目標の設定時、実習期間

中に何度か目標の達成度について学生を喚起することが必要である。

- ④実習記録については、今後充分検討し、学生にとって記録が次の実習に反映でき、記録することで看護観・職業観が養われるような記録ができることを望む。
- ⑤受け持ち患者の疾病や看護については肯定度が高く学習効果も上がっていることから現状の方法で進める。
- ⑥病棟でのカンファレンス・実習後学内で行う症例報告・反省会については肯定度が非常に高く今後も継続していきたい項目である。

#### V おわりに

看護基礎教育において、臨床実習は軽視することのできない重要な学習方法である。その臨床実習を効果的に進めるための一方法として本学が実施している学内実習について、また、病棟における学習内容、実習の展開についての方向性がみえた。しかし、カリキュラムが改正され従来実習時間として込み入れてきた各教科の実習前後の学内実習を計画することが困難となり（学内で行う実習は実習時間として認められなくなった）今後この学内実習により効果を上げることができていた内容をどのような学習方法で補っていくかが今後に残された課題である。

#### 引用・参考文献

- 1) 小池妙子；看護教育におけるカンファレンスの意義,看護教育,Vol32,No7,1991,医学書院
- 2) 吉武香代子；臨床実習の変遷と今後の展望,看護教育,Vol31,No13,1990,医学書院
- 3) 高橋ジュン；臨床指導を考える,看護教育,Vol26,No2,1985,医学書院
- 4) 黒川肇；今日の看護教育の課題,看護教育,Vol26,No2,1985,医学書院
- 5) 秋元典子他；臨床実習における看護過程の展開のための教師と病棟看護婦の連携,看護教育,Vol28,No13,1987,医学書院
- 6) 内田獅子編；看護過程へのアプローチ2,1985,学習研究社
- 7) 佐藤禮子編；看護過程へのアプローチ3,1985,学習研究社
- 8) 杉森みど里；看護教育学第2版,1990,医学書院,

平成4年5月29日 受付

平成4年6月11日 受理